

を 120 室に減らしたり、所有していた船を売却するなど経営の合理化を図り、翌年度は集客が 83,390 泊と過去最高を記録し、初の黒字に転換したという。なお、最近 3 年間の集客数の推移は下表のとおりである。

表 12 はいむるぶしの集客数推移

年度	集客数	稼働率
1997	83,390 泊	75.2%
1998	80,620 泊	73.7%
1999	77,363 泊	71.7%

「はいむるぶし」資料より作成

1 年間を通してみると、7~8 月、年末年始、GW には長期滞在型の観光客が多数を占める。そのほかの時期は、高齢者の周遊観光が多い。また、夏期は 3 割がリピーターで、典型的なパターンは、オープン当時にハネムーンで利用した人が再訪するというものらしい。年間平均泊数は 2.7 泊。ただし、夏期に限ると 3.2 泊である。

2) 「はいむるぶし」進出以後の島民の生活

正社員は約 60 名で、夏期は臨時雇用を含めて 100 名弱まで増員して対応する。夏期のアルバイトは、マリンレジャーを趣味とした内地の人が多い。従業者は、総務部（業務課・施設客室課）、営業部（営業課・レクリエーション課・ショップ課）、料飲部（調理課・食堂課）に分かれて配属される。

尾方（2000）は、1998 年 4 月時点における従業者の出身地と役職・所属部署との関係を調べている。これによると、課長以上の管理職は 9 名、正社員 32 人、アルバイト 52 人（通年が 35 人、短期が 17 人）であり、それぞれに占める小浜島出身者の人数は、0 人、4 人、11 人である。部署ごとの人数は、総務部 22 名、営業部 26 名、料飲部 36 名であり、営業部には小浜島出身者が 1 名しかいないが、総務部には小浜島出身者 10 名、石垣島出身者 7 名と、地元あるいは八重山の出身者が多数を占めている。料飲部では、親会社の社員が勤務することが多いが、料理の仕込みを行なう調理課のアルバイトは、すべて小浜島出身者で占められている。このように専門性の高い部署と接客サービスが中心となる部署には、小浜島出身者がほとんど配属されていない。

さて、「はいむるぶし」に直接雇用される人数だけでなく、間接的な雇用効果にも眼を向けておこう。島内に、ホテルから出される大量の寝具を洗濯しているクリーニング屋がある。これは、もともと「はいむるぶし」の従業員だった人が、ホテル側からの勧めに応じて開業した会社である。また、小浜港からホテルまでの間を送迎するバスは、島内の有力者が設立した地元企業によって運転されている。「はいむるぶし」はこのバス会社に出資するとともに、年間契約を結んでいる。

そのほかの経済的効果としては、「はいむるぶし」が、細崎の漁民が獲った魚介類を優先的に買い取ることを挙げることができる。しかし、細崎の漁民によれば、最近の「はいむるぶし」は高級な魚介類しか買い取らなくなつたという。

農産物については、「はいむるぶし」と小浜島との関係は希薄である。ホテルの土産店で、小浜糖業の黒糖が販売されているくらいである。小浜島では、各家庭の庭先でゴーヤ、キュウリ、カボチャ、冬瓜など、さまざまな野菜をつくる人が多いけれども、自給用なのでほとんど出荷することはない。したがって、「はいむるぶし」は農産物を自前でつくろうと、オープン当初からイスラエル農法を導入し、コンピューター管理によるハウス栽培を統けてきた。ところが、5 年ほど前に大型台風が襲来して、骨組みもろともビニールハウスが壊れてしまい、ついにイスラエル農法を断念したそうだ。

ホテルの開業以降、小浜島民が「はいむるぶし」によって明らかに被害を受けたこととして、園内で飼育していたクジャクが逃げ出して野生化し、農産物に被害が発生したことがある。これは、1985 年頃から顕在化したものであり、現在もまだ被害はあるようだが、島の人がクジャク 1 羽を捕獲したらホテル側が 5,000 円を支払う約束が交わされ、問題は沈静化している。

さらに付け加えるべき点としては、現在、小浜島の南東部にゴルフ場の開発がすすんでいることを挙げておく。これは、「はいむるぶし」の親会社が計画していたものを、（株）ユニマットリゾートが引き継いだたちで、2001 年の秋口には完成させる予定で工事がすすめられている。ゴルフ場の建設に合わせてコンドミニアムも整備することになっている。竹富町は離島振興になるとしてこの

開発を好意的に受け止めているようだ。当然、細崎の漁民は、海が汚される可能性があるので歓迎していないが、島内も竹富町も開発を促進しているので無理な反対運動をせず、被害が生じた場合の補償契約などを詰めているという。

以上、「はいむるぶし」進出が、小浜島の人々の生活に及ぼした影響についてみた。大型リゾート施設であるのに、あまり大きな影響が現れていないように見える。この点については、「はいむるぶし」が小浜島の人たちの日常生活圏外にあるので、正負どちらの影響も大きくないと診断する人がいる。

安里（1991）は、「はいむるぶし」の敷地内には2つの御嶽があり、これが買収されたことによる島の人たちの精神的なダメージを指摘している。

これは、日常生活圏の外にあっても、島民にとって濃密な意味を持つ空間であれば、本土資本によって買い取られることは、貨幣換算できない価値を損失することになりうるという問題を提起した点で重要である。しかし、聞き取りによると、

敷地内にある2つの御嶽と島民との関係は、買収の前後で大きく変化していないようであった。

2つの御嶽のうちアルムティワンは、島の東部にある御嶽で、かつて御用布を貢納するための航海の安全祈願をしたところである。集落から遠く信仰に不便だったので、集落近くのカホネに遷座したとされる（山城編、1972: 56）。この御嶽は「はいむるぶし」の敷地内にあるが、買収されてからも、村内集落からいったん砂浜に出て、それから浜づたいに自由に往来することができる。この御嶽には、今でも豊年祭の前に1年に1回だけ氏子たちが通っているという。

他方のカンダカーという御嶽は、名前が「神が高い」を意味するように特別な位置にある御嶽である。島民であっても場所を知らない人が多いそうだ。氏子は、十二支のうち子・寅・午・戌の神年のときだけ、カンダカーへ掃除に行くことがある。しかし氏子の人であっても、最近10数年は行っていないという。

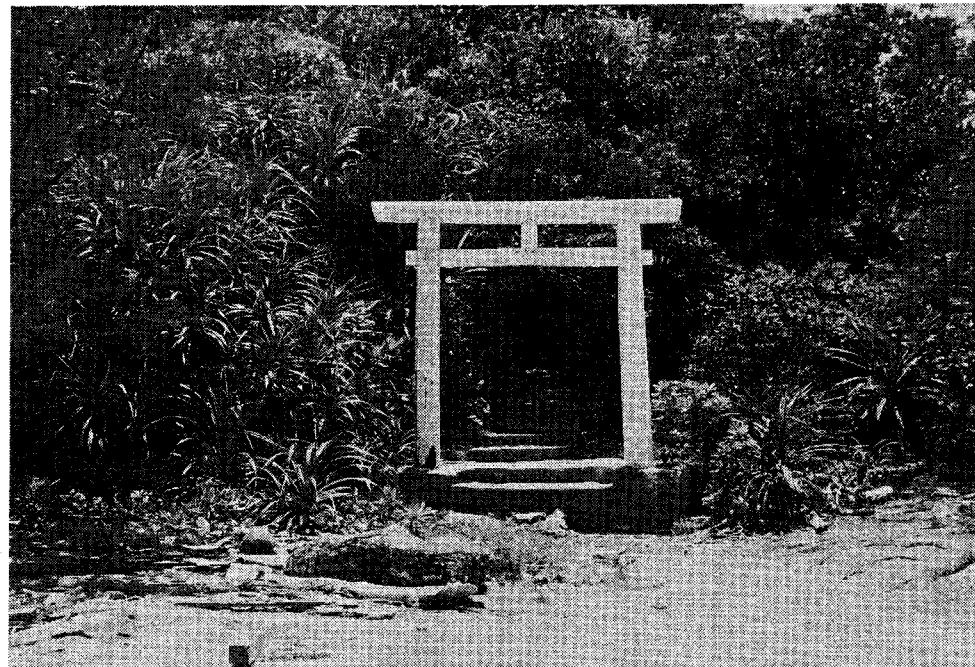


写真9 「はいむるぶし」の敷地内にあるアルムティワン

また、このカンダカーは、干ばつ時に雨乞いをするとき、いくつか御嶽を回って最後に訪れるところであったそうだ。だが、天気予報を知るようになって、雨乞いの儀式は行なわれなくなった。

このように、「はいむるぶし」の敷地内にある2つの御嶽は、現在でも手を加えられず保存されており、土地が買収されたことによって、島民が大きな精神的なダメージを負ったとは考えにくい。

3) 地元バス会社の設立

小浜島には、コハマ交通という地元資本によるバス会社がある。この会社は、「はいむるぶし」との関係が密接であり、小浜島の観光の現状を把握するために触れておく必要があるので、ここでその設立の経緯と現状を把握しておく。

コハマ交通が営業を開始したのは1998年で、最近のことである。しかし、島の有力者が、地元に新たな雇用機会を創出したいとバス会社の設立を検討し始めたのは、それよりずっと前のことであった。これは、話として以前から浮かんでは消え、消えては浮かんでいる一大事業とセットで考えられていた。すなわち、小浜島と西表島を架橋する事業である。

この事業は、竹富島と石垣島を架橋する話や、石垣島にある竹富町役場を西表島に移転する話などと同じように、実現されたときに期待される効果が大きいとされる。小浜・西表間架橋については、次のような効果があるという。①西表島西部の玄関口・船浦港が、冬期は時化で週に1日程度しか利用できないため、東部の大原港を利用せざるをえず、石垣島からの時間距離が長くなる。これに対して、架橋が実現されれば、小浜港を利用してるので、時間距離を大きく短縮することができる。②小浜島と西表島とで別々にサトウキビを生産すると、分蜜糖工場をつくって採算がとれるほど多くの量を見込めない。しかし、架橋が実現されれば、両島で生産されるサトウキビを一ヶ所にまとめることが可能で、現在の分蜜糖工場よりも大型で合理的な分蜜糖工場をつくっても採算がとれるようになる。③小浜島は広くないので、西表島と異なり、バス・タクシーなどの車両サービ

ス事業が成立しない。それでも、架橋が実現されれば、サービス圏の拡大により、車両事業を展開することが可能になる。

この③を期待して、小浜島におけるバス会社の設立は検討されていたのだった。しかし、コハマ交通が設立されたのは、架橋事業が具体的に進められるようになったからではない。「はいむるぶし」の親会社からの独立とバス事業に対する規制緩和という別の要因が働いたのである。

すでに説明したとおり、1996年から「はいむるぶし」は親会社から独立し、独立採算性を敷くようになった。当然、経営の合理化を図らねばならず、その具体策の一つとして、それまで行なっていた小浜港までの送迎サービスを他会社に委託することになった。ちょうどその頃、規制緩和によって、白ナンバーで10人乗りの有償バス事業を行なえるようになったことから、この時期にバス会社を設立しようという機運が高まり、1998年に営業が開始された。

現在、コハマ交通は、「はいむるぶし」利用者の送迎、路線バス、島内観光・貸切送迎の3事業を実施している。「はいむるぶし」利用者の送迎は、ホテルから請け負っているので、3事業のなかではもっとも安定している。路線バス事業は、小浜港と村内集落と細崎集落を結び、島民の足として利用されており、赤字を覚悟して行なっているサービスである。島内観光・貸切送迎は、今のところ需要は多くないが、今後もっとも期待される事業として位置づけられている。1時間で島内を見て回る観光コースのほか、三線の演奏が付くコースや、「島のオジイのユンタク（お喋り）」を含む2時間コースなども用意して、多様なニーズに応えようとしている。また、細崎で漁師が捕ったばかりの新鮮な魚を食べる「いまゆう」コースの新設も計画している。なお、「いまゆう」とは「今とった魚」を意味する。

ところで、島内の雇用機会拡大に結びつくと期待されたコハマ交通の設立であったが、島出身者はほとんどいない。役員・従業員は8名いるものの、島外出身で会社の寮に住む人が多い。島出身者であっても、石垣島から船で通勤しているという。

V. 八重山諸島におけるツーリズムの問題点

1. 竹富島における問題

竹富島の町並み保存を扱った最近の研究報告によると、島を象徴する赤瓦の町並みは、決して古くからの伝統的な町並みではなく、島の人々によって「創られた伝統」であるという（福田、1996；森田、1997）。これらの研究では、観光にみられる「ホスト－ゲスト」の関係を固定的に捉えず、しなやかに両者の関係を読み取っていこうという近年の学問的潮流が反映されており、ホスト側が「文化的流用」によって自己表象や地域アイデンティティを創出していく過程に焦点が当てられている。

「ホスト－ゲスト」の不均衡な力関係を構造的に把握し、そこで実践される政治を告発するという語りが、逆にホスト側の主体性を否定してしまうと批判されて以来、「文化の流用」、「文化の客体化」という概念で観光にみられる諸事象を切ってみせる方法が確立しつつある（山下編、1996；太田、1998）。しかし、竹富島民が赤瓦の町並みを主体的に保存しているという側面にのみ光が当てられているとしたら、それは島が抱える現実の問題を見落とすことになるだろう。以下では、赤瓦の下で現実を生きる人々に目を向け、現在の竹富島における問題点を抽出したい。

1) マニュアル主導型による町並み保存の弊害

竹富島には、伝統的な赤瓦の町並みを保存するために指針となるマニュアルがある。このマニュアルは、町並みの伝統美を把握するために記録された計量データをもとに作成された。したがって、現在、竹富島で実践されている町並み保存事業は、景観工学的に明らかにされた伝統的町並みの標準型と照合して、それから極力外れないように統制されている。

こうした方法が、もし島外の人の発想によって進められているならば、伝統を不变的に捉える本質主義に陥っていると批判されるだろう。しかし、竹富島においては、島内3集落から各4名、合計12名によって構成される「竹富島まちなみ保存調整委員会」によって、町並みのコントロールが行なわれているので、通俗的な本質主義批判は成立しない。町並み保存については、島外の学者の影

響が大きいとはいって、島の人々が主体的に自らを律しているのであれば、こうした取り組みを賞賛こそすれ、批判する道理はないからだ。

ところが、実際に聞き取り調査を実施してみると、現在のマニュアルが厳しすぎるという声が聞こえてくる。たとえば、次男・三男が島に戻りやすいように、初めは安価なトタン葺きの家を造り、落ち着いてから赤瓦に葺き替えられるような現実的な対応を求める声がある。竹富島では、65歳以上の高齢者の占める割合が約34%と高いので、青壮年人口を増やすことが肝要という考えが強く、こうした意見は若い人々から共感を得ているという。町並み保存の先進事例として喧伝される竹富島ではあるが、島の人々の意見は一枚岩ではなく、問題を抱えながらの実践なのだ。

一方、保守的な立場の人の意見はこうである。竹富島に観光客が集まるのは、沖縄の古い伝統的な町並みが残されているからだ。それなのに、現実的な対応策としてトタン葺きを認めてしまうと、自らが抛って立つ基盤を掘り崩してしまう。竹富島が「自立」するためには「自律」が必要だ。

町並み保存に対する現実対応派と保守派の考え方を、このように対立図式として描くことは可能であるが、いたずらに対立点を鋭く描き出しても不毛である。双方の目指している目標像はかなり重複しているように見えるからだ。その共通した理想像とは、島が「自立」した状態になることである。そのために、現実対応派は青壮年人口の増加を図ることが重要と考え、町並み保存については現実的な対応を求め、保守派は観光客にとっての魅力が失われないよう厳格な町並み保存が必要と主張する。つまり、視点の置きどころの違いが、意見の相違を生みだしているといえよう。したがって、島が進むべき方向性については認識を共有しているので、手段をすり合わせることは可能であろう。そして、自立に向けての手段としては、マニュアルに町並みを当てはめていく方法には問題があると言わざるをえない。なぜなら、赤瓦の町並みが「創られた伝統」であるのだとすれば、そこにあったはずの伝統を創り出す契機が、マニュアル主導型の町並み保存には認められないと思うからである。

ゲストから注がれる町並みへの視線を巧みにす

らしつつ伝統を加工していくこと、こうしたしなやかな文化の流用に焦点を当てることが、近年の文化研究の成果の一つだった。そして既往研究の中では、その好例として竹富島が取り上げられていたのだ。ホストのしなやかな対応を否定してしまうと、生じるはずのダイナミズムが作動しなくなり、結果としてホスト—ゲストの関係を固定化してしまいかねない。また同時に、主体性を喪失してしまいかねない可能性もある。現実対応派による不満は、そうした傾向に歯止めをかけて、主体性を回復しようという動きとして現れているのではないか。

とはいっても、町並みが無秩序に改悪されてしまったら、観光客の足が遠のくことは間違いない。竹富島の主産業は観光産業なので、そのような事態を招くことは致命的だ。要は、観光客に対する魅力を損なうことなく、現代の生活スタイルに合った形への軽妙な変化を模索すること、そこに新たな魅力を生みだす源泉があるようだ。そのようにしたとしても、おそらく竹富島は現在の雰囲

気を継承していくのではないか。そのように確信するのは、島の人々にとって赤瓦の町並みを保存することが、地域アイデンティティを維持することに直結しているように見えるからである。

竹富島の集落内を歩くと、空き地のところどころに、古い赤瓦が積み重ねられているのを見ることができる。これは、「伝統的な」赤瓦の町並みを保存していくために、石垣島で古い家を解体したときに発生する赤瓦を持ってきて、島内で使うときまで貯蔵しているところなのだ。その気になって探してみると、赤瓦のほかに、家屋の構造材や屋根の下に敷く細いタケ、あるいは井戸を囲う大きな石なども、再利用のために保管しているところを発見するだろう。そこには、竹富島の町並みにおける良質な部分を保持していきたい、誇るべき地域アイデンティティを継承していきたいという気持ちが表現されているように見える。このような努力が払われていることから、マニュアルから目を遠ざけても、十分に質の高い町並み保存を継続していくだろう。

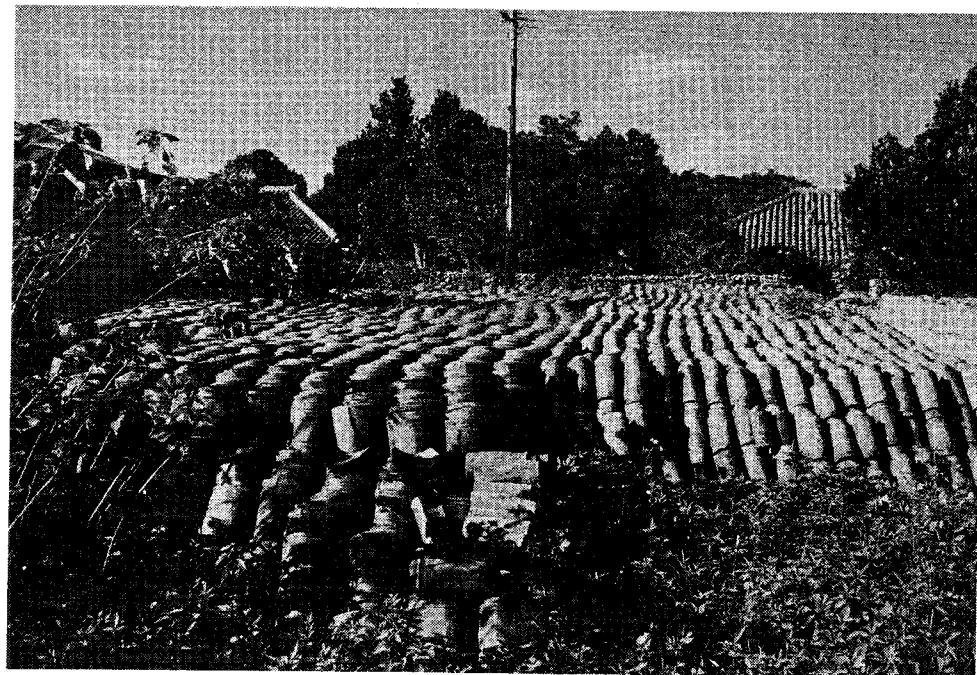


写真 10 空き地に貯蔵されている古い赤瓦

2) 観光事業でイニシアティブを握れない島民

竹富島が観光客で最も賑わうのは冬場である。北海道・東北地方を中心に、避寒のために沖縄離島を巡るパックツアーガ人気を博しており、そのツアーメニューのなかで竹富島を訪れる人が大勢いるからだ。しかし、島で観光事業に関わっている人々は、観光シーズンに客が集中する問題を抱つて口にする。あまりに短時間に大量の観光客をもてなすことが要求されるので、トラブルが生じているとのことだ。実際、観光客から少なくない苦情が寄せられている。たとえば、時間に急かされてゆっくりと見て回ることができない、トイレに行く時間さえもない、ガイドの言葉遣いが乱暴、バスに置いて行かれた、などなど。こうした問題の根源は、1日に竹富島と西表島、由布島を巡る3島コース（小浜島を含めて4島コースもある）が主流なので、時間をかけて竹富島を案内できないことがある。船が遅れて島に到着しても、決められた出発時刻には桟橋まで送り届けなければならない。観光客は、到着して出発するまでの短時間に、グラスボート、水牛車、バスを次から次へと乗りこなす。あまりに盛りだくさんのメニューであるため、自分がどこの島にいるのかもわからず、竹富島で水牛車に乗って、由布島に居ると思ってしまう客もいるそうだ。

このように1日にいくつもの島を訪ね、各島でいくつもの観光スポットを巡るパックツアーガ、冬場の八重山観光のスタンダードとなっている。1日に訪れる島の数が多いほど、巡る観光スポットがたくさんあるほど、ますます人気が高くなるらしく、そうした傾向はとどまるところをしらない。最近の八重山を訪れる観光客の数は増加する一方だ。

たしかに観光客は増えている。しかし、島の人々はすでに現行の観光に限界を感じている。このように招かれざる客が大挙して押し寄せてくる背景には、竹富島の観光事業のイニシアティブを内地のエージェントに握られていることがある。このため、島の人々はエージェントに対してなかなか不満をぶつけることができない。内地のエージェントと島の観光業者との動かしがたい力関係が崩れない限り、問題は解消されないだろう。

そこで最近、竹富島の人々は、エージェントに対抗するための前段階として、自助努力で解決で

きる問題に意欲的に取り組んでいる。その一例が、現在工事が進められている環状道路の建設である。現行の観光事業の問題点として、観光客への十分な対応ができないことのほかに、島民の居住環境の悪化が挙げられる。たとえば、集落に有償バスが頻繁に往来するようになって、集落を縦横に走っている白砂の道路が削られ、雨が降ると凸凹になったり、風が吹くと砂ぼこりが舞ったりするようになったりしたこと、あるいは歩行者の安全な通行が妨げられるようになったことが大きな問題になっている。こうした問題への対応策として、集落を囲むようにぐるり一周する環状道路を設け、集落内への有償バスの進入を原則的に禁止しようとしている。高齢者や障害者など、集落内を歩いて見て回ることが困難な交通弱者はどうするのかなど、まだ細部を詰めなければならないようだが、現状の問題点を克服するための一歩を踏み出している。特筆すべきなのが、この環状道路の計画にあたり、線形、道路構造、修景に至るまで、島の人々が積極的に関与し、納得するまで議論して決めたことである。ここに認められるのは、受身の観光から脱皮しようという前向きな姿勢である。そこに創意工夫が現れており、新たに伝統を創りあげる可能性が秘められているように思う。そして、島の人々が可能な限りの知恵を絞る過程を通じて、内地のエージェントに対抗しうる力が備えられていくものと期待できる。

3) ギンネムの繁茂による島の歴史・文化の消失

竹富島では、集落を取り囲むようにギンネムが繁茂している。環状道路建設は、密生したギンネム林の伐開を避けられないで、道路工事への観光客の対応は一般に冷ややかだ。青い海、白い砂浜、そしてギンネム林の緑を見て、自然が残っているという印象を抱くらしく、その残された自然を破壊して道路をつくることに不快感を露わにする人が多い。

ところで、竹富島のギンネムは燃料用・飼料用にかつて台湾から持ち込まれたものである。島の人々にとってギンネムは、利用することではじめて価値が生まれる森林であった。そのギンネムが繁茂しているということは、島の人々にとってほとんど価値の無い自然が残されていることを意味



写真 11 集落の周囲に繁茂するギンネム

する。

現在、ギンネム林となっている集落の周囲は、観光事業が盛んになる前まで、一面畑が広がっていた。それが、農業で生活していくことが困難になって、島の人々が土地との関わりを断ち、結果としてギンネムがはびこるようになった。つまり、島の人々が意図して自然を「残した」のではなく、自然は「残ってしまった」のである。

ギンネムが繁茂している現状に対して、おおむね島の人々は否定的に捉えている。しかし、ギンネム林をどのように利用していくか有効策が見当たらず、そのまま放置されているのが現状である。

ここで注目したいのは、以前は島内に普通に分布していたデイゴやソテツが、ギンネムの繁茂によって激減したということである。かつてデイゴは、3~4 反の畑に 7~8 本は生えており、木陰を休憩場所としたり、葉は肥料として利用していた。またソテツは、畦に列植されていて、燃料として利用したり、戦後間もない頃には実を食べたりし

た。ソテツは十五夜を過ぎないと伐ってはいけないという集落内のルールがあったというから、それだけ貴重であったのだろう。このように少し歴史を遡れば、島の人々と深い関係があったデイゴやソテツは、畑が見放されるとともに、ギンネムに負けて枯れていった。

観光客にとってギンネム林は「残された」自然に見えて、島の人々にとっては残そうと思って残った自然ではなく、見放されることによって「残ってしまった」自然である。つまり、人と自然との関係が切れたことを表徴する自然である。

ギンネム林の下には、島の人々と自然との深い関係の記憶が眠っている。ギンネム林を伐り開いて、そうした記憶を甦らせるとき、または加工したり新たに創造していくとき、忘れ去られつつある人と自然との関係を再び取り結ぶことができるだろう。このとき、竹富島は表象として消費される島から、生産する島へと転換し、観光事業においてもイニシアティブを握ることができるのではないか。

4) 祭事・行事と生業との関係の希薄化

竹富島では、今でも種子取祭を筆頭に多くの伝統的な祭事・行事が行なわれている。言うまでもなく、こうした祭事・行事は、かつて生業としての農業と有機的に結びついていた。しかし、竹富島は農業から観光の島へと変化し、現在、農業だけで生計を立てている人はほとんどいない。こうした状況のなかで、祭事・行事を孤立した文化として継承していくことに意味があるのかと疑問を投げかける声がある。

伝統的な祭事・行事は残存しているとはいえ、歴史を下るにしたがって現代の生活に合うよう変化してきている。虫送りなどは完全に廃れてしまったほか、世迎えではツカサが移動に車を利用したり、十五夜では電線が邪魔なので旗頭を立てて行進するのを止めたりしている。このように現実的な対応策として、伝統的な祭事・行事を続けられるように加工してきたわけだから、農業との有機的な関係を取り戻すべきだとは言えない。けれども、竹富島固有の観光事業を展開していくうとするとき、そこには土地からの生産という視点が含まれているはずである。そのとき、また人と自然との有機的関係が結ばれ、新たな祭事・行事の意味が湧出してくるだろう。

2. 西表島における問題点

1) 島民の雇用を創出しないエコツアー

エコツーリズムの目的は何か。エコツーリズムの基本書では、次の3つを掲げている。すなわち、「地域の自然・文化資源保護と保全」「地域固有の資源を生かした観光の設立と推進」「地域経済の活性化」である（エコツーリズム推進協議会、1999）。

日本におけるエコツーリズムの先進地・西表島においては、この3つの目的は達成されているのだろうか。ここでは、島の人々にとって最も重要なと思われる「地域経済の活性化」に注目してみよう。

「地域経済の活性化」にエコツーリズムが有効と考えられる理由は、地域住民がツアーガイド役を担うと期待されているからである。地域住民は、観光対象となる自然・歴史・文化資源と最も身近に接しており、その過去の歴史や地域における価値なども含めて、幅広く把握しているはずだ。だから、ガイドとして最適であるという論理であ

る。しかしながら、現実に「西表エコツーリズム協会」に加盟している観光関連業者の多くは内地出身者によるものであり、エコツアーのガイド役もほとんど全て内地出身者である。

このように期待に反して、島出身者がエコツーリズム事業に関わらない理由はどこにあるのだろうか。それを探るために、現在行なわれているエコツアーの内容を素描しよう。

西表島におけるエコツアーとは、一般的には、ガイド付きのカヌーツアーを指す。一部、エコツアーの人気の高まりに乗じて、エコツアーという看板を掲げておきながら、ガイドを付けないカヌーツアーもあるらしく、エコツアーのガイドに関して資格制度を設けようという議論もある。しかし、こうした一部例外的なエコツアーを除けば、普通、エコツアーは自然観察が主体のカヌーツアーである。（資）浦内川観光が提供したある日のエコツアーのメニューは次のとおりである。

まず、9時半に集合し、その日の行程についてインストラクションを受ける。それから遊覧船で浦内川を約8km上るのだが、途中、川の概要の説明から始まり、マングローブ（オヒルギ・メヒルギ・ヤエヤマヒルギ）の見分け方、ほかにサキシマスオウノキ、アダン、ホウライチク、オキナワキヨウチクトウ、ヒカゲヘゴなどの紹介がある。軍艦岩と呼ばれる岩の近くにある船着き場で下船してからは、山道を歩いてマリユドウの滝とカンビレーの滝を見学し12時までに軍艦岩まで戻る。ここからそのまま遊覧船で下流へ下るコースもあるが、エコツアーではカヌーを漕いで下ることになる。

12時半に集合して、カヌーの扱い方の指導があってすぐにカヌーに乗り込む。この日は、ツアー参加者のカヌー4艘に対して、ガイドのカヌー1艘が付いた。途中、カヌーを漕ぎながら、岸辺の動植物についての説明を聞くことになる。また、カヌーで下る道のりをおよそ4つに分け、4分の1進むごとに休憩が入る。1回目の休憩では、カヌーから下りて、支流にある小さな滝に打たれた。2回目は干潟に下りて、そこに棲息する小動物（セマルハコガメやシレナシジミなど）やサキシマスオウノキなどの観察、3回目は支流に入りて休みながら、マングローブ林の観察があった。最後の休憩時に、ガイドからマングローブ林の窮状の説明が

あり、それを聞いた後に参加者がツアーの感想を述べ合った後、最初に遊覧船に乗り込んだところまでカヌーで下りる。これでツアーは終了する。

このメニューから、エコツアーのガイドには、カヌーおよび自然観察の講師としての知識・技能が求められていることがわかる。であれば、地域の自然に詳しいであろう島の人々がガイドにならないのはなぜなのか。おそらくその答えは、ツアーディレクターで提供されている知識・技能と島の人々が身に付けていた知識・技能に違いがあるからではないだろうか。すなわち、前者を「眺めるための知識・技能」とすると、後者は「かかわるための知識・技能」であり、性質が異なるのではないか。そして、現行のエコツアーで提供されているサービスには、「かかわるための知識・技能」が活かされる場面が少ないために、内地出身者にも十分に務められるのではないかだろうか。

さらに、ほかの理由も考えられる。このメニューの中で、最も重要なポイントは、最後の休憩時にガイドが伝えるメッセージである。このときのガイドは、世界のマングローブ林が激減している現状を伝え、これを機会に少しでもマングローブの保護を考えてくれたら嬉しいと、少し照れながら語った。四方をマングローブに囲まれた流れのないところで、このメッセージが発せられたとき、ツアーディレクターはみな無言でしんみりとした。個人的には、そのメッセージが素直に心の中にすっと入ってきた。このような巧みな演出ができるのは、浦内川のマングローブ林を鳥瞰的に見る視点を獲得しているからである。この視点は、内地出身者で西表島の自然に惹かれてやってきた人ならば必ず持っているだろうが、島出身者には近すぎて持つことの難しい視点だろう。つまり、島出身者がガイドになりにくいのは、西表島の自然を相対化する視点を獲得することが困難だからかもしれない。

2) エコツーリズムにおけるガイドラインの必要性——動力船とカヌーの競合

西表島のエコツーリズムで、現在、最も熱い議論が戦わされている場所は、船浦湾からビナイサーラの滝にかけて（船浦地区と呼ぶ）である。ここは、島内でも有数のエコツアーの名所である。

しかし、エコツアーが始まられる以前から、動力船による遊覧観光があった。現在、動力船業者とカヌー業者は、森林管理局と竹富町を交えた四者会議の場で、この場所で今後展開されるべき観光のあり方を検討している。進行中のこの話題を今後追いかけてみたいが、そのために今までの経緯をまとめておこう。

最初に問題が勃発したのは3年前の1997年のことである。この年の4月、本土系現地法人（株）西表ダックツアーが、沖縄総合事務局運輸部に対し、遊覧旅客不定期航路事業の許可を申請した。その事業計画は、全長約10m、重量約8tの水陸両用船に観光客を乗せ、船浦湾の橋下からヒナイ川の中流までを往復するというものだった。干潮時には高さ約1.5mのタイヤで移動し、満潮時には船として使用することによって、干満に左右されない営業を目指していた。前の年に設立された西表島エコツーリズム協会は、この計画が明らかになつた直後から反対の立場を表明し、6月末には計画中止を申し入れた。

協会は船浦地区を、エコツーリズムの拠点となるべく観光資源を有していると評価している。それは、西表島エコツーリズム・ガイドブック『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ』に、ピナイサーラのガイドマップがわざわざ付いていることからもわかる。またここは、協会の設立をサポートした（財）自然環境研究センターが、以前に観光資源調査を実施したところもあり、協会にとっては聖地とも言えるような場所だったのだ。

同年7月、協会と当該業者と町の三者から構成される協議会が開かれた。協会側は、船浦湾のほとんどは満潮時でも水位が上がりず、車両として使用する頻度が高まり、干潟に生息するミナミコメツキガニなどへの影響が懸念されると主張した。これに対し業者側は、西表島を訪れる観光客の7割はお年寄りなので、それに対応するためには近代的なサービスが必要であると主張し、話し合いは平行線のまま物別れに終わった。

その後、業者側は当初計画からコース長を大幅に短縮する妥協案を提出したが、計画は自然消滅しようとしている。現在、この業者は水陸両用船を取りやめて、動力船による遊覧観光を行なっている。

このような騒動から2年が経過した1999年6月、船浦地区における国有林の適切利用について、カヌー業者を対象とした説明会が開かれた。これは実質的には説明会というより、国有林を不法に利用していたカヌー業者に対して、沖縄森林管理所が指導するというものだった。業者が国有地内の防風林の中に無断でカヌーを置いていたので、使用に当たっては許可を得るよう求めたのである。そして森林管理所は、個人事業主に土地を貸すことはできないので、組合を組織するよう要求するとともに、組合を設立して使用許可の申請を提出するまでの期限を10月までと区切った。このため、カヌー業者は慌てて組合をつくる必要性が生じたのである。

なぜ、それまでは黙認されていた国有林での不法使用が、急に咎められるようになったのか。それには、船浦地区を自然休養林として指定したいという國の方針が背景にある。西表島では、仲間川、浦内川沿岸の国有林が自然休養林に指定されている。逆に言うと、自然休養林に指定されているこれらの河川において、動力船による遊覧観光の営業が許可されている。現在、船浦地区で観光事業を営むことができるのも、この地区が自然休養林に指定されるという条件があるからだ。つまり、近い将来に指定されることが確実なので、観光事業が黙認されてきたのである。そして、いよいよ船浦地区の国有林を自然休養林として指定しようとするという段階になって、これまで見逃されてきた不法行為を糺そうと国が指導し始めたのだ。

国有林の不法使用はカヌー業者に限ったことではない。動力船業者も、不法に道路を取り付け、マングローブ林を伐採して桟橋を設置した。このことは、自然保護の観点からすると負荷の大きい行為だったため、またしても反発を招いた。

こうした状況の中で、カヌー組合を組織することが求められたので、組合員となるカヌー業者は2つの方向性に別れた。それは、国有林の使用許可を得るために組合を設立するというグループ（「ビジネス派」としておこう）と、観光資源に恵まれた船浦地区において、カヌーと動力船とが混在している観光の現状を変革するためガイドラインを作成し、自然環境への影響を軽減していくことを目

指すグループ（「エコロジー派」とする）である。現在は、西表島エコツーリズム協会の会員でもあるエコロジー派に該当する人が組合長を務めている。しかし、彼の話では、使用許可を得られればよいという業者が少なくないので、組合はうまく機能していないという。現在、組合は15業者からなるが、最近加入した4業者はすべて地元の業者である。組合長は、そうした地元の業者がカヌー事業を金儲けの手段としてのみ見ていると嘆く。西表島エコツーリズム協会が主催する講習会に参加するよう勧めても、そうした業者は決して参加しないという。

ところで、ガイドラインの作成は、エコロジー派のカヌー業者が一方的に勧めようとしているのではない。何かと対立することの多い動力船業者もガイドラインを作成する必要性を感じている。動力船業者は、いろいろな人が許可も得ずに勝手にカヌー事業を始めていることを問題視している。船浦地区に限らず、西表島のあらゆる河川がカヌー事業の適地かどうかという視点から評価され、適地であれば入り込んでいいって、業者がますます増えていることに憤りを感じているのだ。また、カヌーから下りてマングローブ林を歩くことについても、動力船で行くより自然環境へ負荷を与えると批判する。養殖を例にとって、人間が持ち込む病原菌ほど危険なものはないので、そういう可能性を高めるることは慎むべきとも言う。

現在、定期的に開かれている四者協議の場では、自然休養林を指定するという方向のもとで、船浦地区における観光のルール作りを模索している。西表島におけるエコツーリズムの拠点として、仲間川や浦内川とは違った新しいガイドラインを作りたいカヌー業者と、現状の観光需要を鑑みて、高齢者でもピナイサーラの滝まで容易に行く権利を確保したい動力船業者の主張は、妥協点を見いだすことが困難であろう。しかしながら結果として、ガイドラインを作成し、カヌーと動力船とが共存できるゾーニングが設定できたら、それは極めて画期的なことである。この四者協議の結果がどのようになるか、今後引き続いて見守っていきたい。

3) 消えた木炭の歴史を紡ぎ出す環境教育——船浦中学校の取組

西表島の西玄関である船浦港に近い船浦中学校には大きな炭窯がある。そこで、PTAがモクマオウを使って炭を焼き、できた木炭を学校と島内の商店で販売している。

そもそもこの木炭作りの発端は、部活動にともなう遠征費を捻出するため、17年前にPTAの有志が始めたものだ。その後、負担の大きさゆえに不平をこぼす人も多かったようであるが、現在に至るまで続いて実践されている。それが、新たな展開を見せ始めたのは、2000年度に入ってからである。総合的な学習の中で、西表島の木炭をテーマとすることになったからだ。西表島の石炭の歴史については、三木健らによって明らかにされてきたが、林業、ことに木炭の歴史についてはあまり資料が残っていないようだ。このため学校では、昔、木炭を作っていた人々に聞き取りを行なうことにしている。

一見したところ、ツーリズムと関係がないように見える船浦中の環境学習を、なぜここで取り上げようと思ったのか。これについて説明しよう。

周知のとおり、西表島の森林は90%以上が国有林である。このため、ほとんどの森林は勝手に伐採することが禁じられている。しかしながら、かつての西表島の森林は、島内はもちろん小浜島や竹富島など周辺離島の人々によって建築材として利用された歴史がある。また、戦後、島の人々は、薪炭材として日常的に利用したり、サトウキビを煮詰めるための薪材、あるいは黒糖を詰める樽の原料として利用するために伐採することがあったという。さらに、山林を持たない宮古群島の戦後復興に充てるため、宮古民政府によって西表島から材木を伐り出す伐採隊が組織され、西部の森林が伐出されたこともある。東部の大富では、開拓時に発生した木材を薪として売ることで、開拓当初の貴重な収入源としていたという話を聞いた。

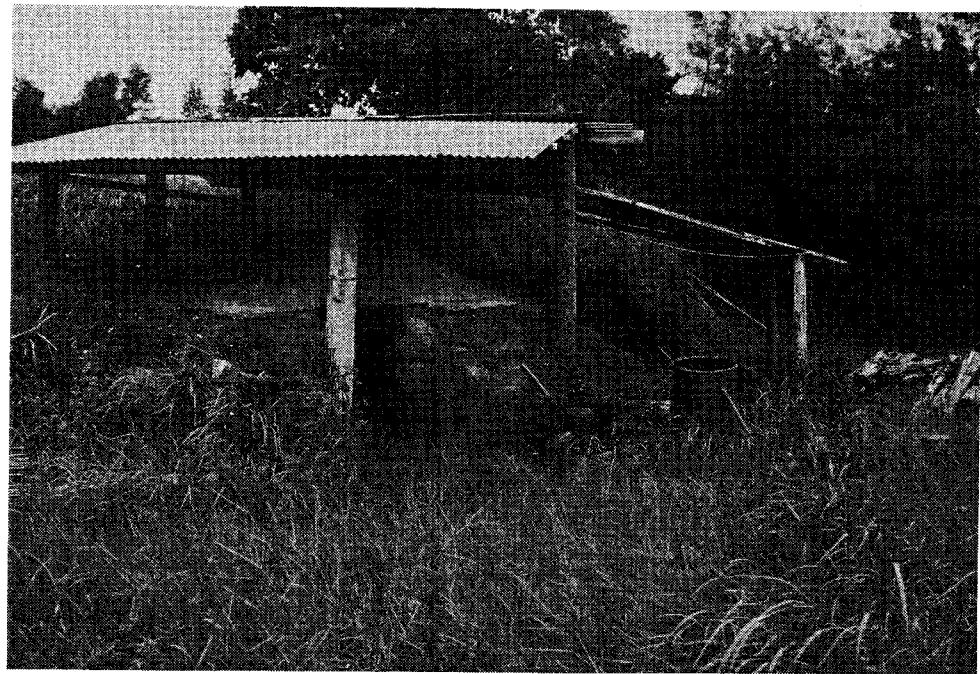


写真 12 船浦中学校にある炭窯

このように、従来、西表島の森林は人々の生活とも密接な関係があったのだが、本土復帰して国立公園に指定されてからは、それまでの関係が切断された。このことは、西表島の森林と「かかわるための知識・技能」が継承されなくなっていることを意味している。そしてこのことが、西表島におけるエコツーリズムの中で「眺めるための知識・技術」を優先させることにもつながっているように思われる。

これといくぶん関連することとして、染織を勉強するために西表島に住み着いた人から聞いた話が印象的であった。彼女によれば、お年寄りは、染料を取るためにヒルギを伐りに行くことを口外しない。それは、林野庁の人に怒られるからだという。ここに見られるのは、国有林の管理が厳しくなったことによって、これまで培ってきたヒルギ染めという技術が、隅の方へ追いやられていることである。島に住む人々と自然との関係がこのように切断されるとき、自然はかかわる対象から眺める対象と変化する。このとき、地元の人々が歴史的に築いてきた自然との関わりは、自然を破壊するものとして捉えられ、悪しき関係として排除されていく。西表島におけるエコツーリズムが自然観察中心であるのは、こうしたことが背景としてあるからではないのか。しかしこれを反転させれば、西表島の人々と自然との関係が再び適切なかたちで結合されるとき、現在個人の身体の中に眠っている知識・技能が承認される機会を得て、改めて個人のアイデンティティを獲得することができよう。船浦中で実践されている環境学習は、そうした方向に向けての足がかりになる可能性が秘められているはずである。

3. 小浜島における問題点

1) 島の表象としての「はいむるぶし」

調査中、八重山の離島を巡る観光客と話をみると、小浜島には行ったことがない、あるいは今回初めて来たという人が多いことがわかる。八重山諸島における観光実態については、今年度になるまで調査が実施されることがなかったため、具体的に数字を挙げることはできない。しかし、八重山に魅せられた観光客にとっては、原生的自然が残る西表島、古い町並みが残る竹富島と比較

すると、小浜島はあまり魅力が無い島として映っているようだ。他の離島よりも魅力が無いようにみえる理由として、しばしば八重山観光に魅せられた人々が口にするのは、リゾートホテル「はいむるぶし」があるからということである。彼(女)らは、はるばる八重山までやって来て、典型的なリゾートアイランドにみえる小浜島に来ることを躊躇しているのだ。彼(女)らが小浜島を訪れるとしたら、その動機の多くは、八重山フリークとしてすべての離島には足を踏み入れたいという理由である。

一方、もちろん「はいむるぶし」で楽しむことを目的に小浜島を訪れる観光客も数多い。ホテル側の話では、年間40,000人程度の宿泊客があるという。また、2回以上訪れるリピーターの数も、夏のトップシーズンでは約3割に及ぶらしい。「はいむるぶし」の利用者は、いったんホテルの敷地に入ると、帰るときまで外に出ることもなく、マリンレジャーなどを楽しむことが普通である。2000年の4月～7月の間にホテルで貸し出されたバイク、自転車の数が、それぞれ80台、270台と少ないことは、宿泊客の出不精ぶりを裏付けている。したがって、こうした客の目に映る小浜島は、「はいむるぶし」および港からホテルに至る道路から見える景観だけということになる。

このように、小浜島を「はいむるぶし」で代表されることによって、そこを敬遠する人々が存在するのと同時に、そこを訪れる人々も存在する。つまり、多くの八重山を旅する観光客にとっては、「はいむるぶし」＝小浜島として表象されているのだ。

ところで、「はいむるぶし」の敷地面積は約150haあり、小浜島の約5分の1を占める。つまり、残りの約5分の4は以外の土地であり、面積から言えば「はいむるぶし」は圧倒的に小さい。それなのに、「はいむるぶし」が小浜島を表象してしまっている。

ここでは、小浜島を表象する「はいむるぶし」という語りを批判的に超えていくために、そのような「はいむるぶし」をいったん括弧にくくって、「はいむるぶし」の進出が小浜島に与えた影響をきちんと追跡していくことにしたい。

2) 別世界としての「はいむるぶし」の進出

「はいむるぶし」が営業を開始したのは、今から21年前の1979年のことである。しかし、島への影響を見るためには、それ以前に親会社のヤマハが土地の買い占め始めたところまでさかのぼる必要がある。残念ながら、当時の状況についての聞き取り調査はまだ十分ではない。けれども、ヤマハの土地の買い占めとそれへの行政当局および島の指導層の対応については、反対運動を組織した代表者による次のような記述がある。

〔ヤマハは〕西表島仲間川河口のヤッサ島、そして小浜島のビルマ崎の買占めに総力を挙げていた。行政や地方政治の衛にある者、農家と接触の強い小浜航路の船員等を手下にして、予定地百五十ヘクタールのうち約半分近くの個人有地を、当初三、三平方メートル（一坪）当り一ドル、復帰後円に移行して徐々に値上げしていき一九七五年（昭和50）年頃には千円程度で買いあさってしまった。八十町近い町有地も、勿論議会の承認のもとではあるが売却処分されてしまった。

地元では、小浜開発期成会を発足させ、観光企業誘致による島の活性化を図るためにと称し、土地買い占めへの協力体制をとっていた。島外転出の地主に対しては、文書をもって協力を呼びかけ、土地を手離すよう催促し、地代についても会の決定する金額で協力せよと積極的に動いていた。（慶田盛、1988: 209）

ヤマハが小浜島に目を付けたのは、沖縄の本土復帰直前の1970年頃であるとされている。そして、復帰した翌年の1973年には、小浜公民館総会においてヤマハ誘致を促進する決議がなされた。形式的には地元が本土資本を誘致する方向で動く中で、抗議行動が全く展開されなかったわけではない。町有地内にある学校造林地が民主的な手続きを経ずに売却処分が決定されたことに反発して、石垣在住の小浜出身者が中心となって「こはまを守る会」が組織された。しかし、結成が1974年7月と時すでに遅く、町当局への抗議行動と県当局への陳情、要請、小浜島での懇談会の開催などを行なったものの、大きな成果を上げることなく自然解散した（慶田盛、1988）。

このように、小浜島へのヤマハの進出に対して一時的に反対運動が展開されたこと也有ったが、1979年7月に「はいむるぶし」がオープンした。それから2年後の「はいむるぶし」の様子については、西表島で本土資本の土地買い占めに抵抗していた「西表島土地を守る会」と「西表地区宿泊業組合」によるレポートがあるので、それから伺い知ることができる（西表島土地を守る会・西表地区宿泊業組合、1982）。

それによると、ヤマハは「地元の野菜も魚も買う、又雇用も地元を優先的に採用する」と言つてきたのに、その約束が次第に守られなくなっていると報告している。たとえば、野菜は地元から全く買っていないし、魚についても上等な魚は買ってくれるが、小浜近海でよくとれる魚は買わないので漁協へ出すようになったとある。また、雇用の面でも、従業員75人のうち50人は本土から来ており、10人は石垣島から、残りの15人だけが地元採用で、しかも地元の人はすべて臨時雇用であり、決して地元優先でないと断じている。そのほか、島内観光案内業が期待されていたのに効果が現れていないことや、「はいむるぶし」の女性従業員と島の青年との交流が乏しく、花嫁問題も解決できていないことなどが報告されている。そして、「ダマされた」という強い不信感が表れていると同時に「部落とは全く関係ない」と語る人が多いことから、ヤマハの進出は小浜集落の発展になっておらず、また島の人々はヤマハを当てにしていないとまとめられている。

現在の「はいむるぶし」と小浜・細崎集落との関係も、このレポートに描かれている状況と大差ない。やはり、野菜は地元から買わないし、魚も高級魚が中心に取り引きされている。ホテル内の土産物店に入っても、小浜島で生産されたものは、黒糖と養殖モズクだけしか見ることができない。正社員は40名程度だが、そのうち小浜島出身者は4名である。

このように、「はいむるぶし」と小浜島の人々との関係は、20年以上の時が経っても密接にはなっていない。オープン前の期待感が遠い記憶の彼方に消え去っているのか、現在の島の人々には「ダマされた」という被害者意識があまり感じられず、「はいむるぶし」をあたかも別世界のように集落と切り

離して捉えている人が多いようだ（これについて
は、もう少し突っ込んだ調査が必要であるが）。

3) 島民の雇用に及ぼした影響

「はいむるぶし」がオープンして20年余り経過したが、小浜島の人々が期待したような正の効果は認められなかった。島の人々が何よりも期待したのは、若者の流出をくい止めるために雇用機会を増大することだった。この点に絞ってみると、「はいむるぶし」の従業員として島の出身者がほとんど雇用されてこなかつたし、今でもされていない事実がある。このため、「ダメされた」と感じているのではないかと予想されたが、実際は異なる。

「はいむるぶし」がオープンしてそれほど時間が経っていない頃、小浜集落の実力者がホテルに怒鳴り込みに行ったことがある。それは、地元優先に従業員を採用すると約束しながら、全然そのようになっていないことに立腹したからであった。しかし、地元の若者はほとんど応募して来ないし、また、応募してきた者を採用しても長続きしないから地元優先に採用できないというホテル側の説明を聞いて納得し、今度は逆に島の若者に対してだらしないと思うようになったという。

現在、ホテルで働いている人がどのような人であるのか尋ねてみると、それはマリンレジャーを趣味としている人が多いとの返答があった。ホテルでの勤務は、朝晩が忙しいかわりに昼間は多少暇になる。このため、中抜けと呼ばれる休憩時間を取ることが多い。その間に、多くの従業員はマリンレジャーを楽しむらしい。そのようなライフスタイルを選好するのは本土の若者が多いようだ。地元の若者にそうしたライフスタイルが普及しているかというとそうではない。だから、彼(女)らは「はいむるぶし」では働くないのである。彼(女)らの多くは、中学卒業後、石垣島で下宿しながら高校に通い、高校卒業後は沖縄本島や東京・大阪など大都市に出ていくことが一般的だ。つまり、

「はいむるぶし」ができたことによって雇用機会は確実に増大したが、ホテルの従業員としてのライフスタイルと地元のそれとがミスマッチであるために、期待した効果が現れていないのだ。

地元の有力者が中心になって設立したバス会社・コハマ交通でも、地元にはあまり雇用効果が現れ

ていないことを聞かされた。新しい雇用機会が創出しても、それを魅力的に感じるのは決して島出身者に限らないのだろう。

ここまで、直接的な雇用拡大に限定して話を進めてきた。この点からみれば、「はいむるぶし」の進出は、たしかに地元の人々の雇用拡大に貢献していない。しかし、施設管理は沖縄ダイケンという会社に委託しており、こここのパートとして島のお年寄りが多く働いているので、間接的な雇用の拡大にはつながっている。また、港とホテルの間の観光客の輸送、物資の運送、寝具等のクリーニングは島内の会社に委託しており、ホテル内で働くなくとも間接的に雇用が拡大されている面にも目を配っておくべきだろう。ただし、こうした雇用の拡大があっても、若者は島から出ていくことには変わりがないのだが。

4) 島の自然環境に及ぼした影響

現在の「はいむるぶし」の敷地（ビルマ崎一帯）は、ホテルができる前にどのように利用されていたのか。これを尋ねると、森だった、田んぼだった、畑だったと返答がある。

戦争直後、小浜島には大勢の引揚者がやって来て人口が急増したので、島は全面的に開墾された。戦前までのビルマ崎一帯は森林が卓越していたそうだが、例に漏れず伐採されて田畠が作られた。私有地はもちろん町有地も開墾された。しかし、それまで開墾されてこなかつた理由があるわけで、ここは土質が悪かったようだ。このため、ここを開墾したある人は、いざ町有地を開墾者に払い下げられようというときにそれを拒否したという。それくらい農業を営むには、土地の悪いところだったようだ（余談だが、彼はあのとき町有地を買っておけば、その何倍もの金額でヤマハに土地を売却できることを少し後悔していた）。島の人々にとっては、あまり関係性がない土地だったようである。

また、「はいむるぶし」がオープンしてからの海洋環境の変化についても、土地改良による影響が大きいので、ホテルの問題としては挙がっていない。むしろ、「はいむるぶし」のすぐ近くの海で、細崎集落の人が養殖モズクを栽培していることから、ホテルからの汚水による水質への影響は小さ

いのだろう。

このように現時点では、「はいむるぶし」が小浜島の自然環境に及ぼした影響は大きないと判断せざるをえない。また、ビルマ崎一帯には2つの御嶽があり、これが買収されることによって生ずる島民の精神的なダメージが指摘されることもあるが、聞き取りからは、そのような結果は得られていない。

なお、「はいむるぶし」とは関係ないが、護岸工事が島の人びとに精神的ダメージを及ぼしていると指摘する声がある。小浜節に唱われている白浜(ウータ)が、台風時に海水が水田に入るのを防ぐためコンクリート護岸によって改変された。このことに対し、「昔から島人に愛され、親しく歌い継がれてきた小浜節の精神(こころ)が、あの真白いウータの浜が消え失せつつある現実を前にしたとき、人々の心にどんなイメージを与えるのであろうか」(黒島, 2000: 79)と批判を投げかけている。

5) 島民に及ぼした意外な影響

「はいむるぶし」の進出が、小浜島の人々にとって正の効果をもたらしたこともある。

大洋漁業が小浜島から撤退し、小浜製糖の工場が廃止になろうかというときに、島の経済が破綻するという危機意識から、小浜公民館が2,000万円で買い取ることになった。このとき、竹富町は1,500万円を出資した。そのようなことが可能だったのは、竹富町は、現在の「はいむるぶし」の敷地に約80町近い町有地を持っており、それをヤマハに売却することで大金を得ていたからである。小浜島の製糖工場廃止の危機を「はいむるぶし」の進出が救ったという側面もあるのだ。

また、教育施設の継続に果たしている「はいむるぶし」の影響も見逃せない。保育園・小中学校とも、「はいむるぶし」の従業員の子どもが占める割合は高いらしい。ある小浜集落の人の印象では、小浜集落、細崎集落、「はいむるぶし」、それぞれの子どもの割合は同じくらいだと言う。さらに、祭事においても「はいむるぶし」の人々の協力は欠かせないものになっている。

一方、もちろん負の効果もある。最近は大きな問題になっていないようだが、「はいむるぶし」で飼育していたクジャクが、ホテルの敷地外に飛び

出して野生化しているという問題がある。クジャクの野生化にともない、農業・畜産に被害が出ている。たとえば、牛の飼料がロールで巻いてあっても食いちぎられてしまったり、サトウキビやサツマイモなどの若芽が食べられたりする。野生化の被害が表面化してから、ホテル側では有害鳥獣としてクジャクを駆除していた。しかし、駆除の有資格者が亡くなってしまったので、現在では被害が現れる時季に、クジャクの生死にかかわらず、捕らえた人から1羽5,000円でホテル側が買い取る決まりになっている。奄美大島におけるマングースとは違って、地域生態系への影響については、今のところ問題視されていないようだが、移入種の影響は農業被害だけにとどまらない可能性があるので、注意して観察する必要があろう。

6) 経営健全化が細崎集落に与えた影響

「はいむるぶし」はオープン以来、赤字経営が続いていた。そこで、1996年にヤマハリゾートから分社独立して、(株)はいむるぶしとして再スタートを切った。翌年の1997年度は、19年目ににして初めて単年度で黒字となり、集客も83,390泊と過去最高を記録した。従業員の給与を2割削減したり、外注を増やすなどの合理化を進めた成果が現れたわけである。しかし、こうした経営の健全化が、意外なところに影響を及ぼすことになった。

細崎集落の漁師は、従来、「はいむるぶし」と個人契約を結んで取引をしていた。ところが、合理化にともなってホテル側は、それまでばらばらだった伝票を集落内でまとめるように要請した。現在は、取引を一括して処理する事務局が置かれているが、まとめようというときにいろいろと問題が生じたらしい。これは集落内の問題だからと、詳細について尋ねることはできなかったが、要するに、ホテル側に買い取ってもらいやすいものを捕る人とそうでない人が露わになって、人間関係が悪くなつたようだ。たとえば、ガサミはホテル側に連絡を入れなくても、捕れば必ず買い取ってもらえるという話がある。これは裏を返せば、一般的の漁獲については、ホテルに納める前に連絡が必要であり、限られた量だけ売っていることを意味している。

漁師は自分の技術と相談しながら、各自で経営

戦略を立てている。ガサミを捕る人もいれば、モズクの養殖を行なう人もいれば、近海で定置網を仕掛ける人もいる。そして、年間を通じて、こうした漁をどのような配分で行なうのかは十人十色である。このため、漁師によっては「はいむるぶし」の需要に合致する人もいるし、そうならない人も存在する。

「はいむるぶし」がオープンした当時、突然にホテルの食事としての需要が発生したものだから、集落内に挙金主義がはびこって乱獲が起こり、捕った魚を強引に売りつけるといったことが生じたという。その後、「はいむるぶし」と集落は和解したのであるが、伝票をまとめようという段階になって、誰がどの程度ホテルと取り引きしているかが判明し、集落内で妬みややっかみなどが生じたらしい。現在では、表面的にはあまり見えないが、しこりが残っているという。

また、集落内の人間関係とは別のところにも、間接的ではあるが、「はいむるぶし」の経営健全化の影響が現れている。それは、2001年10月にオープンが予定されているゴルフ場開発の問題である。この計画は、もともとヤマハが計画していた(仮称)「はいむるぶしゴルフ場計画」を引き継ぐもので、18ホールのゴルフコースとクラブハウス、コンドミニアムを整備する予定となっている。「はいむるぶし」は、このゴルフ場の建設を含めて事業申請を許可されており、アセス書も通していたのだが、経営の健全化のために事業を中止し、土地を(株)ユニマットリゾートに売却した。現在、工事が着々と進められているが、このゴルフ場建設は細崎集落の漁師を心配させている。

漁師は観光のためであれ農業のためであれ、土地を大きく改変する事業には反対したい気持ちがあるものだ。これまでの経験から、特に土地改良にともなって発生する赤土流出は、小浜島近海のサンゴを破壊してきたという印象を抱いている。このため、今回のゴルフ場開発についても、工事にともなう赤土の流出や事業開始後の農薬の流出などによる漁場環境の悪化を懸念している。当然、開発業者と漁協との間に、被害が発生した場合の補償方法についての取り決めがあるようだが、そのようなことは重要ではない。漁師の実感では、最近10年くらいの間に、漁獲量が1/3程度まで減

少しているそうだ。そのため、これ以上の開発には基本的には反対である。けれども、抗議活動を行なうほどの強硬手段に訴えることはない。その背景には、農家には農家なりの、観光業者には観光業者なりに生活する権利があるという冷静な見方がある。

注

- 1) 松井(2000)は、琉球列島の離島における環境史研究が十分でないことを問題として取り上げ、島に住む人たちの生活の歴史を再構するうえで、こうした研究の重要性を主張している。
- 2) 地理学的には、高(い)島(High Islands)、低(い)島(Low Islands)と呼称される(目崎, 1980)。
- 3) 『八重山毎日新聞』2000.8.4より。
- 4) 平田観光(株)の観光パンフレットより。
- 5) 上勢頭(1976: 339)に、「かにふ」が砂土の土地、「ましら」が小石の土地である。これは、それぞれカニブとマシラに相当するのだろう。
- 6) 1970年頃まで、八重山諸島においては、数kmの遠隔地まで水田耕作に通う農家がみられた。石垣島では、南岸の集落から北部の水田まで、また西表島では、竹富島・新城島・鳩間島から船による通耕があった。このような遠距離通耕が生じた理由は2つあって、人頭税とマラリアである。八重山では1637年から1902年まで人頭税が課せられ、田の有無に関係なく米を上納しなければいけなかつたので、遠隔地まで水田耕作に通っていた。しかし、水田のあるところはマラリアの有病地だったので、無病地に住居を構えて、遠くの水田まで通耕したのである(浮田典良, 1974)。
- 7) 『琉球新報』1993.12.5および1998.10.11より。
- 8) 最近まで、島内にクルマエビ入りそばを食べさせる店があったが、今は休業中である。
- 9) 亀井(1991)は、崎山(1972)からの引き写しが多いので、これと同じ記述がみられる。
- 10) 聞き取りと『朝日新聞』2001.1.10による。
- 11) 波照間島、竹富島、黒島の竹富町出身者(地元)から構成されたので、こう呼ばれた。
- 12) マリユドゥとは「マリ=丸い」「ユドゥ=淀み」、カンビレとは「カン=神」「ビレー=座る」、ピナイサーラとは「ピナイ=髪」「サーラ=下がったもの」という意味。
- 13) ヤマナ=山、カラ=川、スナ=海、ピトウ=人という意味。
- 14) 狹い土地しか持てない人のなかには、西表島まで行って水田を借り、イネをつくる人もいたが。

- 15) 小浜小学校創立百周年記念誌編集委員会編
(1997: 538)には、イガンダキ(ホオライチク)、ハカタラー(ホライチク)と記されおり、それらがホウライチクを指すものと思われる。
- 14) 小浜節の歌詞は、「小浜てる島や／果報ぬ島やりば／大岳ばくさて／白浜前なし」。
- 13) このときパインを導入したのは7軒ほどだったという(竹富町史編集委員会, 1993: 52)。

文 献

安渓遊地

- 1986 「島の暮らし——西表島いまむかし」
木崎甲子郎, 目崎茂和編『琉球の風水土』築地書館: 126-143。
- 1988 「高い島と低い島の交流」『民族学研究』53(1): 1-30。

安里英子

- 1991 『揺れる聖域——リゾート開発と暮らし』沖縄タイムス社。
- エコツーリズム推進協議会編
1999 『エコツーリズムの世紀へ』。

福田珠己

- 1996 「赤瓦は何を語るか——沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動」『地理学評論』69(9): 727-743。

今井一郎

- 1980 「八重山諸島西表島におけるイノシシ獣の生態人類学的研究」『民族学研究』45(1): 1-31。

石垣金星

- 2000 「西表島から島おこしを考える」『地域開発』425: 52-60。

石垣市

- 1999 『平成10年度 統計いしがき』。
西表島エコツーリズム協会

- 1994 『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトウ 西表島エコツーリズム・ガイドブック』。

西表島土地を守る会・西表地区宿泊業組合

- 1982 「小浜島におけるヤマハ『はいむるぶし』進出の実態レポート」『琉球弧の住民運動』CTS阻止闘争を拡げる会, 19: 21-23。

入嵩西正治

- 1993 『八重山糖業史』石垣島製糖株式会社。

亀井秀一

- 1991 『竹富島の歴史と民俗』角川書店。

慶田盛正光

- 1988 『島に生きる』。

金城朝夫

- 1988 『ドキュメント 八重山開拓移民』あまん企画。

小浜小学校創立百周年記念誌編集委員会編

- 1997 『うふだき』竹富町立小浜小学校。

小林茂

- 1984 「南西諸島の『低い島』とイネ栽培」

『民博通信』23: 77-80。

黒島精耕

2000

『小浜島の歴史と文化』。

来間泰男

1979

『沖縄の農業——歴史のなかで考える』
日本経済評論社。

真板昭夫

2000

「環境保全に関する都市と中山間地域の連携の仕組み——西表島におけるエコツーリズム導入の事例から」総合研究開発機構, 植田和弘編『循環型社会の先進空間——新しい日本を示唆する中山間地域』農山漁村文化協会: 81-111。

松井健

2000

『琉球の離島環境史・序説』松井健編
『自然観の人類学』榕樹書林: 407-437。

三木健

1990

『リゾート開発——沖縄からの報告』
三一書房。

宮城文

1972

『八重山生活誌』沖縄タイムス社。

森田真也

1997

「観光と『伝統文化』の意識化——沖縄県竹富島の事例から」『日本民俗学』209: 33-65。

目崎茂和

1980

「琉球列島における島の地形的分類とその帶状分布」『琉球列島の地質学研究』5: 91-101。

西山徳明

2000a

「島の暮らしとまつり・観光」『造景』26: 32-34。

2000b

「伝統的な景観管理とその変遷」『造景』26: 38-41。

2000c

「竹富島における現代の景観管理」『造景』26: 42-45。

岡村麻生・西平守孝

1991

「イリオモテヤマネコに対する西表島住民の関わりと意識」『沖縄島嶼研究』9: 13-72。

沖縄県企画開発部

2000

『離島関係資料 平成12年1月』。

太田好信

1998

『トランスポジションの思想——文化人類学の再創造』世界思想社。

大富開拓史編集委員会編

1992

『開拓四十年史』大富開拓団。

大山了己

1995

『うすれゆく島嶼文化——歌謡と自然認識の世界』ひるぎ社。

尾方隆幸

2000

「沖縄の離島における観光地域の構造——座間味島と小浜島の比較研究」
『沖縄地理』5: 99-115。

琉球大学教育学部社会科教育研究室

- 1997 『1996年度 琉球大学教育学部社会科調査報告集——竹富町小学校3、4年生社会科副読本「結びあう島じま」改訂版』。
- 崎山毅
1972 『蝶蝶の斧——竹富島の真髓を求めて』錦友堂写植。
- 高原繁
1985 『郷土文学二 小浜讀本——隨想錄望郷第二集』。
- 竹富町
1999 『竹富町の概要 平成11年度版』。
竹富町教育委員会
1988 『竹富町竹富島歴史的景観形成竹保存計画書』。
- 竹富町史編集委員会編
1993 『竹富町史・別巻3 写真集ぱいぬしまじま——写真にみる竹富島のあゆみ』竹富町役場町史編集室。
- 辻弘
1985 『竹富島いまむかし』辻理容所。
- 上勢頭亭
1976 『竹富島誌 民話・民俗編』法政大学出版局。
- 浮田典良
1974 「八重山諸島における遠距離通耕」『地理学評論』47(8): 511-524。
八重山ミンサー記録誌及び記録フィルム作成委員会編
1993 『八重山ミンサー記録誌』竹富町織物事業協同組合。
- 山下普司編
1996 『観光人類学』新曜社。
- 山城浩
1972 『小浜島誌』小浜島郷友会。
- 安室知
1998 「西表島の水田漁撈——水田の潜在力にかんする一研究」渡部忠世監修・農耕文化研究振興会編『農耕の世界、その技術と文化V 琉球弧の農耕文化』大明堂: 108-149。

松村 正治 (Masaharu Matsumura)

1969年、東京都生まれ。
東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻・博士課程。
東京大学理学部地学科地理課程卒業後、環境コンサルタント研究員を経て現在に至る。
専門は環境社会学。
二次的自然（里山等）の保全主体としての環境NPO、および離島におけるエコツーリズムの研究に取り組んでいる。

日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業『アジアの環境保全』
「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」

Environment,
Development
and
Culture
in
Asia-Pacific Societies

アジア・太平洋の 環境・開発・文化

No. 2

30 March 2001



【特集 沖縄——離島の架橋・埋め立て・観光開発】

沖縄地域での調査研究からわかつてきた若干のこと

平安座島における人と自然とのかかわりと開発にともなう文化変容

与那城町の開発の経緯と地域の変容に関する中間報告

年表 与勝半島と島々の開発をめぐる歴史的状況

八重山諸島におけるツーリズム研究のための基礎調査

【研究論文】

ソロモン諸島の親族組織と資源保有・利用形態



未来開拓大塚プロジェクトメンバー (50 音順)

石森 大知 (神戸大学大学院総合人間科学研究科)
伊藤 貴子 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
井上 真 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
梅崎 昌裕 (東京大学大学院医学系研究科)
大塚柳太郎 (東京大学大学院医学系研究科)
小川かほる (千葉県立中央博物館)
鬼頭 秀一 (東京農工大学農学部)
佐治 靖 (福島県立博物館)
篠原 徹 (国立歴史民俗博物館)
蔣 宏偉 (筑波大学大学院環境科学研究科)
菅 豊 (東京大学東洋文化研究所)
須藤 健一 (神戸大学国際文化学部)
関 礼子 (帯広畜産大学)
田中 求 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
寺嶋 秀明 (神戸学院大学人文学部)
中澤 港 (東京大学大学院医学系研究科)
西谷 大 (国立歴史民俗博物館)
福島理栄子 (名古屋大学大学院国際開発研究科)
古澤 拓郎 (東京大学大学院医学系研究科)
松井 健 (東京大学東洋文化研究所)
松村 正治 (東京工業大学大学院社会理工学研究科)
緑川 泰史 (東京大学大学院医学系研究科)
山内 太郎 (東京大学大学院医学系研究科)

編集・発行 未来開拓大塚プロジェクト事務局

東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

TEL : 03-5841-3608 FAX : 03-5841-3395

ホームページ : <http://future.humeco.m.u-tokyo.ac.jp/>

E-mail : webmaster@future.humeco.m.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本 三美印刷株式会社
